

大学共創プロジェクトの軌跡

～大学間連携による人材育成・能力開発の試み～

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授
北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター客員准教授

林 透

2013年3月に、北陸地区の国立4大学の協定に基づく「北陸地区国立大学学術研究連携支援事業」としての2年間の活動を終えた「大学組織力向上のための共創プログラム開発研究」(大学共創プロジェクト)について、企画提案者である林准教授に振り返ってもらった。

「共創」をコンセプトに 大学教育の向上をめざす

大学共創プロジェクトでは、金沢大学大学教育開発・支援センター、富山大学大学教育支援センター、福井大学高等教育推進センター、北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンターに関わる教職員と学生がチームを形成し、大学教育向上への貢献にチャレンジしてきた。

プロジェクト立ち上げの背景には2つの思いが込められていた。一つは、大学組織を活性化する「場」の構築の観点である。教員、職員、学生が集う「場」、地域の大学人が集う「場」を構築し、コミュニティとしての大学のポテンシャルを最大限に引き出すためには、教員、職員、学生が大学教育を共に創り上げる「共創」というコンセプトの発信が効果的と考えた。

もう一つは、大学間連携の実質化の観点である。法人化直前の2002年12月に北陸地区国立大学連合に関する協定が締結されたが、これは、国立大学再編・統合の危機感によるものだった。近年、大学間連携の実質化が求められる中で、北陸地区の国立4大学間の教員、職員、学生を橋渡しする取り組みが必要不可欠と考えた。

「共創」というコンセプトは、近年、各地で取り上げられ、京都産業大学「燦 presents『京産共創』プロジェクト」や、大学マネジメント研究会「共創工房」などの取り組みが見られる。

大学を取り巻く環境が多様化し、大学に対する要望が高度化する中で、職域を超えて対話し、創造する柔軟性や積極性が求められている表れであろう。

多様な層の交流が 学びと気づきを生む

この2年間、一つひとつの取り組みを積み重ねてきた。2011年度には教員と職員による共創をめざし、「教育企画、教務、学生支援」をテーマに、アクションリサーチ手法(change agentとしての研究者が現場の実務者と協力してデータを収集分析し、問題解決する実践的研究手法)を適用した調査研究に取り組んだ。そして、同年12月に開催した「大学共創プロジェクト合同セミナー」において、メンバーである教職員がその成果を披露した。

2012年度には学生をメンバーに加え、教員、職員、学生による共創へと発展させた。知識創造技法(人間の思考プロセスに基づき、新たな発想を支援する方法)を活用したグループワークを通して、大学教育で育成すべき人材像について理解を深める場の構築をめざした。

北陸先端科学技術大学院大学の大学院生が中心となって企画について議論を重ね、実施に漕ぎ付けた「大学共創フォーラム2012」では、教員、職員、学生、市民が約60人集まり、グループワークを通して、大学教育で育成すべき人材像を提案し、その理由や育成



方法について議論した。「夢を追いかけることができる人間」「前のめりになって自分の学びができる人間」「大学で得たことを表現できる人間」など、多様な提案がなされ、熱気溢れる全体討議が展開された。グループでの意識共有だけでなく、個々人が実践シートに行動宣言を記し、自らにフィードバックする仕掛けを取り入れた。

多様な職種や年齢層の交流は新しい学びや気づきを生み、明日への活力を引き出す学習効果を備えている。そういう意味において、参加した教員、職員、学生の人材育成や能力開発に貢献できたと感じている。

われわれ大学共創プロジェクトは、2年間の取り組みを総括すべく、「大学共創宣言」をまとめ、共創を以下のように定義した。

- ①教員、職員、学生が、協働という形式を超えて、大学教育を共に創り上げるということ。
- ②大学間連携により、個々の組織文化を超えて、大学教育に関する共通課題について考え、課題解決や新たな方向性を見いだしていくこと。

今後は、アクションリサーチ手法や知識創造技法によるグループワークの取り組みの汎用性を高めることが課題である。このような取り組みを通して、教員、職員、学生の間で同僚的意識を培うことができれば、コミュニティとしての大学の機能が増すであろう。大学共創のチャレンジは続く。



はやし・とおる

1996年2月に金沢大学庶務部庶務課に採用。2004年4月に北陸先端科学技術大学院大学総務課に異動し、2010年4月に同大学大学院教育イニシアティブセンター教員となり、2013年4月から現職。専門は高等教育論、大学経営論。